大同特殊鋼株式会社

２０２６年度第２四半期決算説明会

質疑応答（要旨）

開催日　　2026 年 10 月 29 日（木）

出席者　　代表取締役社長執行役員　　清水　哲也

取締役常務執行役員　　岩田　龍司

執行役員経営企画部長　　斎藤　賢一郎

Q．セグメント別に上期対比下期の利益の変化内容を教えてほしい。

A．[特殊鋼鋼材セグメント]

減益になる要因は主に 2 つある。1 点目は数量減による影響である。自動車関連の需要が弱い。日系自動車生産見通しを 25.0 百万台（5 月想定値）から 23.8 百万台に下方修正した。ASEAN での日系自動車メーカーのシェアダウンが短期的には止まらないことを織込んだ。産業機械関連は堅調ではあるが、上期対比下期が増えることを織込むのは楽観的と判断して上期横ばいの前提とした。2 点目は固定費増の影響がある。上期に在庫が積み上がった影響による固定費減の反動が下期にキャリーされてくる。年度合計の調整後営業利益は 85 億円であるが、スライドギャップ影響があるなかで一定の利益水準を確保できる見通しであると評価している。

[機能材料・磁性材料セグメント]

増益の主要因は半導体製造装置向けステンレス鋼の数量増による影響である。固定費の水準が全体として上がってきているため、増益幅は小幅に留まる見通しである。

[自動車部品・産業機械部品セグメント]

自由鍛造品の受注が堅調に推移することに加えて、フジオーゼックスのエンジンバルブも堅調に推移することを織込んで下期は上期並みの利益水準になる見通しである。年度合計の調整後営業利益は 113 億円であるが高い利益水準になってきたと評価している。

[エンジニアリング]

5 月 15 日予想時点の年間 10 億円から変化なく上期対比下期で特に大きな変化点はない。

[流通・サービス]

26 年度の見通しは 40 億円であり、上期対比下期で特に大きな変化点はない。

Q．スライドギャップの時期ずれの期間などについて教えてほしい。

26 年度のスライドギャップ影響については上期-22 億円（鉄スクラップ他-17、エネルギー（ガス・電力）

-5)、下期-18 億円（鉄スクラップ他-5、エネルギー（ガス・電力）-13)、年度合計-40 億円（鉄スクラップ他-22、エネルギー（ガス・電力）-18）を織込んだ。鉄スクラップのスライドギャップ影響は鉄屑価格が高位横ばいの想定で下期に収斂してくるが、エネルギーのスライドギャップ影響は原油価格上昇の影響が下期に拡大してくると想定している。サーチャージ制度は顧客ごとに取引条件が異なるが、鉄スクラップについては 3 ヶ月から 6 ヶ月程度の時期ずれがあると見ていただきたい。エネルギーについては 4 ヶ月から 7 ヶ月程度の時期ずれがあると見ていただきたい。非サーチャージ対象については市況高騰に対してベース値上げすることによりしっかりマージンを確保しにいっている。

Q．スライドギャップが解消した時の利益水準を教えてほしい。
A．決算説明会資料 25 ページにスライドギャップ等の一過性要因を除いた実力ベースの利益水準をお示ししているが、スライドギャップ等の一過性要因がない実力ベースの 26 年度調整後営業利益は 501 億円と評価している。

Q．半導体製造装置向けステンレス鋼が 26 年度かなり数量増になっているがどのように捉えているか教えてほしい。また、生産能力に問題ないかについても教えてほしい。
A．数量増の全てが実需増だとは見ていない。数量増の一部にはサプライチェーンのなかでの在庫積み増しの影響もあると考えている。来年度以降の計画については、半導体製造装置の売上高予測や顧客からの情報収集をしながら、在庫調整が入る局面がくるかもしれないことも意識しておく必要があると考えている。生産能力については、造り切れるだけの設備能力増強をしてきた。ただし、この設備は航空・宇宙向け製品との共用設備である。航空・宇宙関連も強い受注状況であり内容構成等をしっかり見ていく必要があると考えている。来年度、造りにくい製品などが増えてくるようであれば多少納期調整を考える必要が出てくるかもしれない。受注増が恒久的に続くようであればそれに応じた設備能力増強も検討していきたい。

Q．機能材料・磁性材料セグメントについて、受注環境を踏まえると下期の利益水準が低いように見える。上期対比下期の利益の変化内容を改めて教えてほしい。
A．下期の利益が保守的に見えるかもしれないが固定費増を織込んでいる。固定費の総額が増えることに加えて、特殊鋼鋼材セグメントの数量減によって機能材料・磁性材料セグメントへの固定費の割り振りが増えていることも固定費増の要因の一つである。

Q．自動車部品・産業機械部品セグメントについて、自由鍛造品が高い受注水準が継続するという説明があったが上期対比下期で利益が増えない要因を教えてほしい。
A．自由鍛造品の受注は少しずつ増える傾向で推移しており、売上収益について下期は上期対比増収になる見通しである。利益は固定費増によって下期は上期並みの水準になる見通しである。戦略投資の進捗に伴い減価償却費が増えてきているが、現時点では減価償却費増を上回るほどの大幅な増産には至っていない。大幅な増益にはもう少し時間がかかると見ていただきたい。27 年度末完工予定の大型四面鍛造機が稼働開始すると利益水準は大幅な増益になってくると考えている。

Q．決算説明会資料 33 ページの産業機械向け（構造用鋼）受注について、物価変動調整後の工作機械受注総額の指数が上昇しているのに対して、受注を横ばいで想定した考え方を教えてほしい。
A．当社の受注は紐付きというよりは流通を経由した取引が大半である。受注想定は流通やその先の顧客などから情報収集して行っている。物価変動調整後の工作機械受注総額の 26 年 7-9 月 100%は現時点では過

剰感があると見ており、現状横ばいの水準が妥当と判断した。多少の上振れを期待している。

Q．流通・サービスセグメントの 26 年度の調整後営業利益見通しについて、過去の水準に比べて増益になっているが内容を教えてほしい。
A．東北特殊鋼を連結子会社化したが、商業施設の賃貸サービスを行っておりその賃料収益が増益の主な要因である。

Q．機能材料・磁性材料セグメントについて、上期の営業利益（121 億円）と調整後営業利益（99 億円）の差の内容を教えてほしい。
A．調整項目の一つとして特別損益 21 億円があるが、その内容は第 1 四半期に計上した磁石事業の子会社の清算益 7 億円と第 2 四半期に計上した東北特殊鋼を新規連結したことによる「段階取得に係る差益」14 億円である。

Q．配当について、5/15 予想対比 4 円/株増額の 56 円/株とした考え方を教えてほしい。
A．株高、金利上昇の環境下で配当利回りを考慮したことや、中間配当を 5/15 予想の 24 円/株で据え置くと配当性向が 30%を下回ることなどを考慮して中間配当を増額した。

Q．半導体製造装置向けステンレス鋼について、クリーンスターA、B、C の足元の構成比率や今後期待することを教えてほしい。
A．クリーンスターの構成比率について、足元は A：B：C＝1：7：2 である。一番グレードの低い C が減って、グレードの高い B が増える傾向にある。徐々に高機能化、高性能化したハイレベルな材料が求められるようになってきており、A や B の比率がより高まっていくことを期待している。また、よりハイグレードの「DSA D22」の開発をリリースしたが、今後この材料が増えてくることも期待している。顧客の技術開発も必要になるので今年度中に受注につながるのは難しいが来年度以降期待している。

Q．金利が上昇する環境下での収益性改善の取り組み、投資効果の回収早期化についての考えを教えてほしい。
A．戦略投資に対する回収早期化は課題として認識している。航空・宇宙関連は長期契約であり回収早期化は難しいが、半導体製造装置関連でのマージン改善をできないかといった活動は継続して行っており前倒しで効果を発現させたい。

本資料に記述されております業績見通し等の数値につきましては、現状で判断しうる一定の前提に基づいております。
今後発生する状況の変化によっては異なる業績結果となることも予想されますので、投資等の判断材料として全面的に依拠されることは差し控えていただきますようお願いいたします。
また今後予告なしに予想数字が変更されることがあります。本資料にある情報をいかなる目的で使用される場合におきましても、各自の判断と責任において使用されるものであり、本資料にある情報の使用による結果について、弊社は何らの責任を負うものではありませんのでご了承ください。